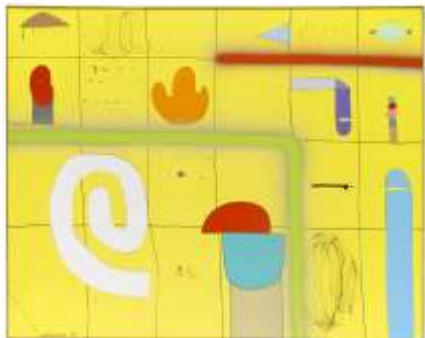


元永定正 展「あみだだだ」  
 ファーガス・マカフリー東京

会期：2020年2月8日～3月14日  
 オープニングレセプション：2月8日（土）午後6時～8時

ファーガス・マカフリー東京は、元永定正（1922-2011）の、それまでの表現方法の反映と革新が生まれる、画期的な時期であった1980年～85年の間に制作された7点の絵画に焦点をあてた個展を開催します。

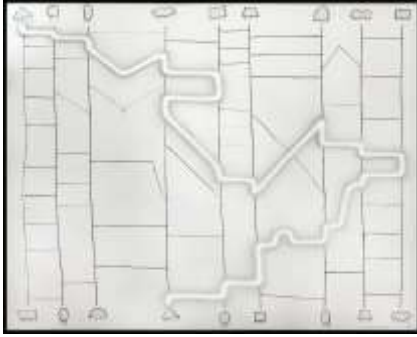


元永は独学で作品制作を始め、1940年代後半頃には地元の定期刊行物や新聞の漫画家および漫画イラストレーターとして仕事を始めました。50年代に入ると、彼の油絵は、シンプルな絵文字、まるで芽吹いていくような、または擬人化されたフォルムによる言語の展開を見せ始めます。それから10年が経過し、作家は、革新的なパフォーマンス、絵画、彫刻、インスタレーションアートなどで知られる、伝説的な具体美術協会（1954～72年）の中心人物となります。元永は第二次世界大戦後、田中敦子、白髪一雄、村上三郎など具体初期会員と共に、「誰もやらないことをやれ」という指標のもと、独創的、実験的、そして自由に遊び心のある精神を築いていきます。1957年ごろ作品はより抽象的で流れるような作風へと変わっていき、その形状から同作家は、大型のキャンバス上で顔料を多量に含み粘り気のある絵の具層を巧みに操作する、「ハイ具体」とも言えるスタイルの絵画を発展させます。1960年代始め、元永の形式主義的抽象表現はさらに発展し、砂利や小石などの予想外の素材を絵画に取り入れました。

元永は1966年から67年にかけてニューヨーク市に滞在し、その期間は彼の作品の進化に大きな影響を与えました。私生活ではこの時期に次男が生まれ、以前からの子供向けアートとイラストに対する興味を広げました。当時はまだ具体会員として活動をしていましたが、彼は絵画への重層的なアプローチを放棄し、アニメのような視覚言語に再び挑戦し、よりフラットでモデル化されたスタイルの作風に移行していきました。元永は独自のグラデーション・エアブラシ・テクニックを発展させていき、子供のためのイメージ制作に実践を広げ、1973年に最初の子供向け絵本をリリースしました。元永と妻である中辻悦子は、全部で33冊の初期学習本を出版し、何百万部もの書籍が普及されました。村上隆のようなアーティストを含む世代の子供たちがその本を読んで育ち、作家の独特な美学が与えた影響には特筆すべきものがあります。

1980年代、元永の作品は革命的な融合をみせます。彼は初期の作品に見られる擬人化されたかたちと、60年代の絵の具が流し込まれ、ほとぼしる作風を結合し、華麗なエアブラシ線のフレーミングの下に、走り書きのように自由に描かれるマスとグリッドを追加しました。ハシゴのように交錯した線の組み合わせによって偶然の意思決定をする子供向けの遊戯「あみだくじ」に喚起された作品《あみだだだ》（1980年）に顕著にもみられるように、これらの作品の多くは子供たちのアートと遊びを直接的に連想さ





せませす。アーティストがゆるいグリッド形式を使用していることは、黄色、黒、白、緑、赤などの大胆な色で塗りつぶされた彼の初期の漫画作品を思い起こさせます。当時すでに元永は50代後半に差し掛かっていましたが、これらの作品が、世界中のハイ、ローカルチャー間を交錯しながら、若い世代のストリートアート、ハイアート、抽象表現の間に出現していたグローバルな時代精神の先駆的な存在となり、そしてそれをさらに発展させたことは驚くべき事です。

1980年代の日本の芸術の進化に対する同作家の影響は、米国でのフィリップ・ガストンとサイ・トゥオンブリーのそれに類似します。彼らは次をになう世代へ新しい表現を追求する土壌を与えました。元永は、1990年代に日本で知られることとなった「スーパーフラット」にも続く道を開きました。1980年から85年までのこれらの作品は、ヨーロッパやアメリカで彼の20~30年後輩となるアルバート・オーレン、ジャン=ミシェル・バスキア、およびエリザベス・マレー等のグラフィティやスクラッチティと純粋な抽象表現を交差させた絵画にも通ずる非常に重要な驚くべき作品群です。

独創性を常に求めつつ、元永は絵画、子供向けの本、彫刻のインスタレーションなど、毎日のように作品制作を続けていました。86歳だった当時、彼は次のように語っていません。「僕は今も具体の考え方は卒業できてないわ。やっぱり、今までに無いような新しいことしよう」。

元永定正は1922年三重県で生まれ、2011年10月に宝塚で亡くなりました。神戸の兵庫県立美術館（1998年）をはじめ、広島市現代美術館（2003年）、長野県信濃美術館（2005年）、三重県立美術館（2009年）など日本国内の多くの美術館で回顧展が開かれました。国外での最初の回顧展は、2014年、アメリカ・テキサス州のダラス美術館にて、同じく具体协会会员であった白髪一雄と共に開催されました。具体美術協会の回顧展はローマ国立近代美術館（1990年）、ジュ・ド・ポーム国立美術館（1998年）、ルガーノ群立美術館（2010年）東京国立新美術館（2012年）、ニューヨーク・ソロモンR. グッゲンハイム美術館（2013年）などで開催。フランス政府からの芸術文芸シュバリエ章や、日本政府からの抽象画家としては初の受賞となる紫綬褒章などを受賞。今展覧会は、2012年、2015年、2018年に続く当ギャラリーでの4度目の個展となります。2016年にはFergus McCaffreyは、マンガ評論家の村上知彦氏とともに、具体学者のミン・ティアンボ教授と故河崎晃一氏によって書かれた、元永の人生と作品に関する最初の英語のモノグラフを出版しました。

### ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。2020年は、マーサ・ユングヴィルト、リチャード・セラ、パティ・スミスら個展ほか多様なプログラムを予定。

プレスに関するお問い合わせ：

電話：+81 (0) 3 6447 2660

メール：tokyo@fergusmccaffrey.co

画像：

1. 元永定正 《きいろのなかで》 1981年、アクリル・キャンバス  
71 1/4 x 89 3/8インチ (181 x 227 cm) ©Motonaga Research Archive Institute Ltd.
2. 元永定正 《ぐれいのおおきなしかく》 1981年、アクリル・キャンバス  
89 3/8 x 71 1/4インチ (227 x 181 cm) ©Motonaga Research Archive Institute Ltd.
3. 元永定正 《あみだだだだ》 1980年、アクリル・キャンバス  
71 1/4 x 89 1/2インチ (181 x 227.2 cm) ©Motonaga Research Archive Institute Ltd.

地図：

(表参道駅 A3 出口)

